

## 第1章 序論

個人の達成動機と失敗回避動機の強さおよび成功・失敗の経験が、要求水準の設定に及ぼす影響について検討していきたいと考えた。また言葉かけが及ぼす要求水準の変化について研究した。試行とともに達成スコアはどのように変化しているか、また、変化の仕方は達成動機や失敗回避動機の強さによって異なるかどうか調べる。そしてその変化の理由を考察した。達成動機と失敗回避動機の強さによって要求水準の設定の仕方がどのように異なるか考察した。

## 第2章 方法

質問用紙を用いた達成動機・失敗回避動機測定、豆拾い課題を実施した。言葉かけによる要求水準に変化を与えるため3つの条件を設けた。それは、被験者に責める言葉かけのみをおこなう「叱咤条件」、被験者を励ます言葉かけのみをおこなう「激励条件」、一切の言葉かけをおこなわない「コントロール条件」の3種類の条件を設定した。各条件での試行毎における平均得点について、1要因(3水準)の多変量分散分析(被験者内計画)を行った。各条件における要求水準・結果・満足度をpillaiのトレースを用いて検討した。また要求水準・結果・満足度においての各条件をペアごとの比較を用いて検討した。

## 第3章 結果

成動機測定項目の得点の平均は、叱咤条件では2.87(標準偏差 0.36)、激励条件では3.32(標準偏差 0.75)、コントロール条件では3.5(標準偏差 0.44)であった。失敗回避動機測定項目の得点の平均は、叱咤条件では46(標準偏差 2.9)、激励条件では48.7(標準偏差 4.08)、コントロール条件では49(標準偏差 5.59)であった。要求水準(個)の変化は、多変量検定の結果、条件要因の主効果は有意であった( $F(1,17)=31.033, p<.05$ )。t検定の結果、叱咤条件と激励条件では有意傾向であった( $.05<p<.10$ )。叱咤条件とコントロール条件では有意であった( $p<.05$ )。激励条件とコントロール条件では有意差は見られなかった(n.s)。目標差スコアは、多変量検定の結果、条件要因の主効果が有意傾向であった( $F(1,17)=3.147, .05<p<.10$ )。

t検定の結果、叱咤条件と激励条件では、有意差が見

られた( $p<.05$ )。叱咤条件とコントロール条件では、有意差が見られた( $p<.05$ )。目標差スコアを全て足した得点は、叱咤条件では17.5(標準偏差 0.59)、激励条件では8.1(標準偏差 0.82)、コントロール条件では6.9(標準偏差 0.96)であった。

## 第4章 考察

達成動機測定では、コントロール条件が3.5(標準偏差 0.44)で最も高い得点となったが、男子学生の平均値は下回った。各条件とも大きな差は見られなかったためほぼ横ばいの結果ではないかと考えた。また叱咤条件の被験者には、挑戦・成功といった欲求が若干低い傾向にある被験者が集まったのではないかと考えた。失敗回避動機測定では、コントロール条件が49(標準偏差 3.59)で最も高い得点となり男子学生の平均値を上回った。コントロール条件と激励条件ではほぼ横ばいで緊張や不安といった特性が高い傾向にある被験者が集まったのではないかと考えた。一方で、叱咤条件は失敗回避動機が他の条件より低い傾向に見ることができた。筆者は、要求水準が高い人ほどそれに対する失敗回避動機も高くなるのではないかと考えた。しかし、図3からコントロール条件での要求水準が低かったことから、動機だけが関与しているとは限らないと最終的に考えた。人の目標設定は言葉かけによる要因が大きく、達成動機が高い傾向にある人ほど堅実な目標設定を立てるのではないだろうか。つまり動機づけを高めたい人には責める言葉かけによって奮起させ、達成動機が高い人にはその人のやりたいようにやらせることが重要なのではないかと考えた。このときに人を励まし続けることは、人の動機づけを上げる要因にはならないのではないかと筆者は考えた。

## 第5章 結論

達成動機・失敗回避動機測定から失敗回避動機が高いとそれに伴って要求水準も高くなる傾向があることがわかった。人が立てる目標の困難度は、動機づけに限定されるものではなく、外部からの叱咤激励も大きく関わっていることが本実験からわかった。要求水準の変化は叱咤激励によって大きく変化することがわかった。